

論 文

「森鷗外の統計学観」

——今井武夫との論争を中心として——

高 木 秀 玄

I

森鷗外はきわめて論争を好んだ。たとえばドイツ留学中、明治20年(26才) 1月10, 11日の2日間にわたって当時のドイツの著名な地理学者ナウマンが日本の地勢、風俗、政治および技芸を説くに当り不穩の言を以てしたことに対して、アルゲマイネツァイツング紙上で大駁論を試み、更に駁論第二篇を作り、師のペッテンコフェルに提出している¹⁾。また、鷗外は博覧強記の人でもあった。しかし、わたくしが本稿で特に指摘したいのは彼は当時としては非常に深い統計学についての知識をもっていたということである²⁾さらに、本稿がとりあげる鷗外とスタチスティック社の幹事、今井武夫との1カ年にわたる論争が明治22年という鷗外が5カ年のドイツ留学を終えて帰朝した次の年に展開されたこと、すなわち当時のわが国の状態と滞独中にその身につけた西欧的思考法と科学へ対する真摯さ、さらに当時のわが国の軍部の軍医部軽視の弊風へ対する彼の鬱憤が一度にこの論争で爆発した感をいだかざるをえないのである。

その論争は(1) Statistik なる語の訳字をめぐる問題、(2)統計学が独立の科学であるか、単なる方法論あるいは補助科学であるか—したがって、その対象と方法の問題、いわゆる統計的法則の何たるかについての根本問題をめぐって展

開されたのであるが、その論ずるところは今日においてもこの学問に関連するものにとり重要なものがあり、その挙げる諸文献はこれまた今日でもこの学問の研究に従事するものにとり重要なものばかりであって、この意味でもこの論争は今日でも価値あるものというべきであろう。

さて、論争の発端は明治22年2月「東京医事新誌」第569号に掲載された鷗外の「医学統計論の題言」であった。この題言に対して匿名氏の「スタチスチックと云はずして、統計と云へるや問ふものあり」これに対して同誌、第573号に「統計に就て」なる題でその所見を述べた。この匿名の主は鷗外の所論より判断すると今井自身のようにであるとおもわれる。しかるに今井自身がはっきりその名を挙げて鷗外に反撃の一文を発表したのは「スタチスチック雑誌」第37号、(明治22年6月)上の「統計に就て」である。どの論争もそうであるが、今井のこの論文ではまだ後にみるような激しさはない。ただ鷗外を「此統計家否刀圭家」と称し、あるいは医学者は専門の医学の研究だけにとどまり、専門外の問題には口を入れざるよう警告を発しているが、これは当時のスタチスチック社の人々がわが国の統計学界で占める立場より、あるいは当然のことであったのであろう。ところがこの新婦朝の鋭気溢るばかりの鷗外にとってみれば、彼等何にするものぞの気概で満ちていたのであろう。彼の方にこそ激しさが窺われるのである。すなわち、「汝首領の敵、やわか其儘に置くべきと、そが機関誌なるスタチスチック雑誌第37号にて激烈なる反駁を試み玉いぬ。今井君の議論は一次の条々に示すが如く—「真」には遠きこと多く、稍識を卑しむの嫌なきにあらねど、かく迄にその首領を弁護する情誼の程はともかくにも今の世には有り難かるべし」⁴⁾と感情的になって「分疏」を述べてるのである。いうまでもなく、ここでの首領とはスタチスチック社の主杉亨二をさす。この「分疏」に対する今井の反論は「再び統計に就て」(スタチスチック雑誌、第39号(明治22年8月))であり、そこで「仇討とは夢々存じもよらざる次第なりき。さすれば前日の統計に就てふ論文は夫れとは明かさず杉先生の演説を暗殺せんとしたるものなりしか。ても恐ろしき刺客の振舞かな。夫とは知らず俱天戴

天の仇討を為したるは是をや過ちの功名とやいふなるべし」⁵⁾と述べている。ところが、鷗外は湖上逸氏の名でここでの今井を「スタチスチック雑誌」第37号の「前今井氏」と同誌第39号の「後今井氏」とに分け、その所論の分裂を中心に「統計三家論」を東京医事新報第59号(明治22年8月)に戴せた。さらに同誌同号に「答今井氏夫君」なる漢詩を戴せ、「漁史必識」とあり、10月、603号の「読第三駁議。寄今井武夫君。鷗外漁史韻」⁶⁾とともに再び今井を攻撃した。これに対して今井は「スタチスチック雑誌」第41号(明治22年10月)に「三たび統計に就て」なる反論を試みた。その文にはいよいよ今井も激烈さを加え、鷗外の漢詩はその辞世の詩なりとし、「夫れ或は然らん。果して然らば森氏は遂に説昼き論絶え此詩を遺して論場を退散し玉ひたるものか。残り惜き限りにこそ」⁷⁾と彼独特の筆致で応酬し鷗外の漢詩に対して夜店で手に入れた随筆のなかの和歌という「方外のみたてなる故是非もなし、守ちがいたる七の加減は」を返している。このあたゝで今井は鷗外に押されて、ただ、そのあげ足とり的態度に終っているのである。今井のこの稿に対して再び鷗外は忍岡樵客の名で「三たび統計に就て読む」を「新誌」第604号(22年10月)に戴せている。これは「其根幹枝葉花(?)実(?)癭措を審相して、以て一々に之を品評せんと欲す。」とし、今井が「統計」なる文字を棄てて、「スタチスチック」なる語をとるべしと論じながら、再度にわたるその論文の題に「統計」とい文字を使用することの矛盾をついた。また、守方外なる既述の和歌の人名は「森蘭丸も、守屋大連も森田文蔵も守田勘弥も同人と心得る」¹¹⁾ものなりとし、今井が要点について反論せよというが、その要点とは今井の勝手に想定したものであり、必ずしも学問的に普通性をもたないものであると鋭く反駁している。しかも本稿には「以下継続未定」とあり、鷗外はその述べんとせるものを一応は殆んどつくしたの感をもったのであろう。ところが、今井は「雑誌」第44号(22年12月)「再び統計に就て」、鷗外は再び湖上逸氏の名において「新誌」第605号(22年11月)に「統計の訳語は其の定義に負かず」を戴せ、両氏の一カ年にわたる論争は一応終ったわけである。今井が最終稿は明らかに鷗外の「新

誌」第604号を読んで筆をとったのに対して、鷗外のそれは必ずしも明確ではない。今井の「雑誌」第44号の論法はいよいよ問題の本質から離れていく。述べて曰く。「目指す当の敵なる森林太郎氏論場に跡を暗まされ、いと御名残り惜き限りに存じたる幽暝界にさ迷う氏の怨霊の、ただしまた孤城に打浪されし部下の将士か、一人を忍岡樵客他の一人を湖上逸民と名乗り、山と水とに御名前の縁しかる水陸両面より相踵て攻寄たり。実に近来の一大快事と謂ふべし」¹²⁾とし、鷗外の指摘した「統計」たる文字の使用は牡丹餅ぎらいだからとて「牡丹餅に就て」ということは必ずしも非難されるものでないという全く言葉の上での争いに終る論を述べ「統計の二字をスタチスチックの訳語に用ひることは気に入らず」……「かかる忌まはしき文字を廃棄せんと欲し」「凡そ弁難攻撃の文には要会の処あり、甲の認むるところ必ずしも乙の認むるところにあらず。もし己れが見を以て人を律せんとするときは偶々以て其胸地の広からざるを示すに足れり」¹³⁾とする鷗外の所論に対してあくまで三要点の客観性を主張する。これに対して鷗外の最後の稿はあくまで学問的であって、今井のそれを数段上回るものであった。

以上より、明治22年という年に最初は統計なる訳語より出発し、半ばにして統計学の学問的性格に及んだことは、明治の日本統計学史上に貴重な意義をもつものというべきであろう。以下、両氏の各稿を中心にその見解を追跡してみよう。

- (1) 山田弘倫『軍医、森鷗外』、昭和18年、20ページ
- (2) 鷗外には『万国医事進歩年報』に収録された『日本軍医編成の記及患者統計表』なる研究があり、その職務の必要より、非常に統計を重視した。明治33年12月2日の「第12師団軍医部会会議中部長口演」中、道德統計の問題にもふれている。(山田弘倫、上掲書、115—9ページ)
- (3) もともとこの論文は呉秀三(芳溪)の Österlen, *Medicinishe Statistik*, 1874 の翻訳に求められた題言であったが、わたくしは、そのいずれもみる機会をえない。ただ『鷗外全集』、鷗外全集刊行会、昭和2年第18巻(岩波書店、昭和28年、第26巻)に納めてあるので、それによる。なお刊行会のものを「旧」岩波書店のものを「新」と

して示すことにする。

- (4) 森鷗外「統計に就ての分疏」(『東京医学新誌』(以下『新誌』), 第584号, 明治22年6月(旧682ページ, 新96ページ
- (5) 今井武夫「再び統計に就て」(『スタチスチック雑誌』(以下『雑誌』) 第39号, 明治22年8月) 359—60ページ
- (6) 森鷗外, 『新誌』第603号, 明治22年10月, 新120—11ページ
- (7) 今井武夫「三たび統計に就て」, 『雑誌』第41号, 明治22年10月440—11ページ
- (8) 同上 445ページ
- (9) 森鷗外, 「三たび統計に就て」を読む, 『新誌』第604号, 明治22年10月(忍岡樵客)新122ページ, 旧703ページ
- (10) 同上 旧706ページ, 新125ページ
- (11) 今井武夫「四たび統計に就て」, 『雑誌』第44号(明治22年12月) 588ページ
- (12) 森鷗外「三たび統計に就て」を読む。新126ページ, 旧707ページ

II

既述のように鷗外と今井との論争の発端である前述の「医学統計論の題言」はもともとエステルレンの「医学統計論」の呉秀三(芳援)訳への題言のため
に執筆されたものであって、鷗外はここで統計という語を使用したことが今井との論争の口火となった。鷗外によれば「今日の医学世界に於ては、一辺に実
験的^{ベリメンタル}医学研究を置き、一辺に計数的^{ヌメリツシエ}医学研究を置かざるを得ず。是れ^{インドククチオン}遡源理法
が斯道の進歩の為に荆棘棘鍼を^{エキサクト}搜開するの両釘鉋なり。想ふに確実と曰ひ、
万有と曰ふ、実験に外ならず。統計と曰ひ、^{スタチスチツク}推数と曰ふ、^{プロバビリチエ}均しく是れ計数なり。
請ふ。試に其梗槩を論じて此書を読む者の為に肉眼を装飾するの鑑別^{ガツトウング}的鑿
鑿を為さん」¹⁾と述べ計数的医学研究法の必要を説き、実験の帰納的研究法が一物の必有の性、人の横目立行の如く、あるいは一物の立行の如く、あるいは一物の必遇の機^{エキサクト}の如く、特性特機によるものであり、単数の特は総数に応用される。しかも「特性と特機とを具ふる総数の物は此に由て一^{ガツトウング}数をなす」²⁾。このような特性特機に対して「単数の名は之を総数に応用すべからず。各なる者は類に通じて存在する事なし」³⁾と対立させるが、これは各性各機に相当するも
^{インドイツイドウエル}

ので、実験的遡源法でとらえることの不可能なものである。ここで鷗外においては、特は常であり、各は変であり、特—常には因果がみられるに対して、各—変にはそれがみられないのである。もともと統計とはかかる「各」の研究方法である。われわれはここにそしてまた後述するところの鷗外の統計学観に及ぼしたりユーメリン⁴⁾の影響の強さを窺いうるのである。それはそれとして、彼によれば、すべての現象の原因不明なるものを偶然によるものとする態度は彼によれば「何所思はざるの甚しきや」であり、その不明を救うものこそ統計であり、ここに確率（彼では推数）の概念が登場してくるのである。すなわち、「然らば、則ち計数的遡源法は、実験的遡源法に依て知るべき因果の未だ明かならざるが為に、権りに之を設けて学者の考案を把掖するものなり」⁵⁾とし、統計方法もそれに属する計数的遡源法—計量的研究が補助的方法であることを明らかにする。すなわち彼によれば医学統計論は顕微鏡と析微刀による実験的遡源法とともにとるべき科学方法論であり、その一方のみによるものは「偏翼の鳥」であり「隻輪の車」である。

ところが、この「題言」に対して「何故に余が人ヲチスチックと云はずして統計と云へるやを問ふものあり」⁶⁾、これに答えるために「統計に就て」の稿を起こした。彼にとり別段とやかくの難点はない問題であった。呉秀三がその訳書に「医学統計論」と題し、「同君の使はれた訳を使ひしまで」であったし、もし「統計」なる訳が悪いと思ったならば別にこれを使用しなかったとのことである。然るにこの匿名氏の反問が彼に更に一文をものさしたまでであるが、この稿は次の7点についてその見解を展開している。しかも、鷗外はスタチスチック社の杉亨二の所論⁷⁾を引用して一々、これに反論を試みているのである。

(i) スタチスチックを固守するものは統計は合計の意味もあるが「文字通り統計」の意義にて可ならんと牽強附会するより、学問の道理を誤り、事実を妨害するの甚しきに至らんとする」ものであると。鷗外によれば、これは「慮の深さに過ぎるものであり、理学をへボ理屈の学問と思ひ、化学を妖怪変

化の学問と思ふと唱へ、此訳字を排斥せば誰か之を笑はざらん」⁸⁾と。この点は後程、数度びにわたり問題となる。

(ii) スタチスチッションが「スタチスチックに統計などの訳字あるより、学問上の唱へと通俗の唱へと二つに別れたり」との所説に対して「此学問上の唱へ」は「正義」であり、「通俗の唱へ」は「誤謬」である。たとえば化学という文字より化学＝妖怪変化の学問と誤るものあり、これは化学なる文字のあればこそとて、これを廃し去らんとするが如きものであるとする。

(iii) 「統計の語を英仏等の国語に訳さば奇怪にして文明世界の笑とならん」というスタチスチッションの杞憂を国学、皇学を国家の学、皇帝の学を西語に訳さは滑稽きわまることになる。「此般の説は眼界の狭きより起るなり」⁹⁾と軽く片付けている。

(iv) 理化学等には誤解の弊少なく、統計にはこれ多し。故にこの権謀を以て流俗の弊を救わんとすれば、「其権謀の能く其目的を達するや否を知らざるなり」とする。これこそ後日、今井をして怒りに駆り立てた一文である。

(v) 「目に見て名の付け方のなきものには原名を唱へてランプと云ひテエブルと云ふ。目に見えざればとて学問上の原名には必ず訳字を付けると云ふ道理は聞えず」、更に、「其意味深く訳字の当るべきものなきを強ひて附会せば、本義を失ふうて大なる誤を来さん」と。これに対する鷗外の反論は次のとおりである。抽象的なものであれ、具体的なものであれ「訳の行はるる物と行はれ難きものあり」、たとえば、ランプを灯とせば行灯と混同し、テエブルを机とせば日本在来の机と混同し、ランプ、テエブルの原語のまま用いられている。たまたま統計という字を誤解するものありとして、これを棄てるは「浴余の水を棄てんとて盤中の児を拝せ擲つなり」¹⁰⁾であるとする。また原語のままで長きものはこれを使用するは困難であり、スタチスチックはまさにそれに当るという。他方、「学問上の原名には必ず訳字を付けるという道理は聞えず」というが「訳字を付けぬといふ道理も聞えぬなり」である。

(vi) スタチスチッションが統計なる訳字をとらんとするものは「百数十年

の前に遡って、スタチスツクの歴史に就て其義を探究して、数多の学者をば一々論破して、是れぞ我持論なる統計なりと、証を引き実を挙げて、己の主義を主張するの勞を取らねばならぬ事と思ふなり」と説くが、鷗外にとり大切なのはこのような過去の統計学ではなく、彼にとり現代の統計学が問題であり、従って上述のスタチスツクシヤンの態度は「陋も亦甚し」きものであった。

然らば鷗外の「現代の統計学」とはいかなるものであったか。彼はオンケンの「物的帰納の一理法」がこれであり、これによって「顕（現）象の原因を捜らんとするは猶木に縁って魚を求むるがごとし」であり、ここでも統計によって因果法則を求めること可能なりとしたスタチスツクシヤンと真向より対立するのである。また、統計の理法（方法）は「或る徴候即ちシュワイグの所謂分性に就て物を計へ、之を統べて数門とす」¹¹⁾と。すなわち、標識によって調査し、これを整理しグループ分けする方法をいうのである。以上より明白なことは鷗外は完全な意味で方法論派の立場に立ってその統計学を理解していたことである。

以上の鷗外の所論に対して今井はその「統計に就て」において大約以下のように反論を展開している。すなわち、鷗外の挙げる化学＝「妖怪変化の学」など極端の弁を弄するのであり、統計に統べ計るの義は全くなく、学問上の唱えに今井がかつて「学問上の唱へ」と「通俗の唱へ」とを区別したことなし。ただし、そのことなくとも「統計」なる訳字は廃棄すべきことを主張する。このことは「統計」を西欧語に反訳する点についても鷗外は極論をなすものという。(iv)について「権謀」なる文字は今井を甚だ刺激したようにこれは「誠に迷惑千万なること」であり「権謀など術策などいふことは更に覺へなし。覺へなきことを喋々することは甘心せざる義なれば本頃は別に申上げず」（255ページ）と述べている。さらに今井は鷗外の所論に一步ゆづるとしても、かりに「統計」という訳字を使用すれば「簿記計算の一科の如く考ふる者あるの憂へあるを如何」とし（256ページ）、「コレスポンデント」が久しく言悪き原語のままで行なわれている事実を挙げて「スタチスツク」をとることの妥当性を強調している。（256ページ。）つぎに統計学の科学性について、今井はあくまで独立科学説をとる。すなわち、彼は他の箇處は許すとしても、「此頃は決して一毫も借す能はず。天法といへる文字或は不穩当なるかも知られど「ナトゥル

リッヘオールドヌング」なり。(258ページ)という。すなわち法則定立こそ統計学の最終課題なりとするのである。鷗外の如く「物を計り、之を統べて数門とすること」を以てスタチスチックとすることは「杜撰の暴言」であるとする。方法論派の鷗外と独立科学派の今井の立場は到底、相容れないものであり、両者が互いに相手の学問論を理解しない限り、この論争は果てるところがないであろう。

(1) 森鷗外「医学統計論の題言」(『新誌』第569号, (明治22年2月), 新85ページ, 旧673ページ)

(2) 同上, 新86ページ, 旧674ページ

(3) 同上, 新86ページ, 旧674ページ

(4) G.v. Rümelin, *Reden und Aufsätze*, 1875, Tübingen, I, *Zur Theorie der Statistik*, 1863, II. 1874.

リユーメリン・権田保之助訳 「統計学の理論に就て」, 『統計学古典選集』第五卷, 375—461ページ

(5) 森鷗外, 新87ページ, 旧675ページ

(6) 同上, 「統計に就て」, 新89ページ, 旧676ページ

(7) 杉亨二「侈智絮の話」, 『東京学士会雑誌』第8編(明治19年2月)

「スタチスチックの話」, 『雑誌』第1号, (明治19年4月)

(8) 森鷗外, 新89ページ, 旧677ページ

(9) 同上, 新90ページ, 旧677ページ

(10) 同上, 新91ページ, 旧678ページ

(11) 同上, 新93ページ, 旧680ページ

III

鷗外は今井との論争を通じて、ますますその統計学観を確立する。22年6月の「新誌」上に発表した「統計に就ての分疏」では、統計学の本質についてより深くその見解を固めている。また、論争である限り、上述の各問題がそのまま引継いで討議されるのは致し方ないところであり、この稿もそのような形式をとらざるをえないのである。

「分疏」において鷗外は以下の七項目について弁明を試みる。

(i) 情と識。テオドオル・フォン・コッペのハイネへ對する情を挙げて、今井の杉亨二への盲目的信服の程を比喻し、「今井君の議論は——次の条々に示すが如く——「真」には遠きこと多し、稍識を卑しむの嫌なきにあらねど、かく迄にその首領を弁護する情誼の程は兎にも角にも今の世には有り難かるべし」¹⁾と今井の態度を批判する。しかし、鷗外自身にもこのことは当てはまるのである²⁾。

(ii) 法と学。まず、「今の世に科学と方法との差を明かにせぬ人の多きは、驚くにも猶余ある事共なり」³⁾という。鷗外にとり、統計学はあくまで理法の一部門であって、今井を説伏するべく、つぎのリューメリンを引用する。「研究に一の奇特なる方法あり。その主なる符標は許多の單事を正確に計へ、之を統ぶるに在り。この方法は当初、政治家の目的、随って政学的の目的を達する資に供せしをもて、一旦この区域にて尤も大なる作用を表はせしをもて、——スタチスチック的方法と名付けられぬ。されどこの方法は、今これを用ゐるべき範圍を思ひ、またその本真を思ひて論ずるときは、ここに局したるものにあらず。実に総括的意義を包蔵す。渠は渾ての学問的方法の特殊なる形の如く、その位置を理法中に占む。⁴⁾」と。これより、今井が医学雑誌にスタチスチックの説を見るとは不思議の事よと述べた⁵⁾ことそのものが鷗外にとり「君が不思議の事と宣ふ事こそ不思議なれ」⁶⁾となる。方法論派の彼にとり、医学雑誌上に統計論文あることは正さに当然すぎることである。

(ii) 彼我の量。当初、鷗外にとり Statistik は統計でもスタチスチックでもよかった。「統計と訳するは比較便宜なりと思ふのみなりき」であつたのだ。然るに今井の例では「統計と云へる誤りたる訳字の普及せるが為に、大切のスタチスチックの本義を誤るを歎ずるなり」⁷⁾とあくまで統計なる呼称を排する。これに対して鷗外は「これを余が言に比ぶれば、その局量、熟れが潤大なるや、熟れが褊小なるや。問ふもおろかな」⁸⁾ことであり、むしろ統計に「統へ計ふる義」のないことを今井が示さなかったことをつき、計へもせず統へもせずスタチスチックの業を採らるといはば、余はその魔法に驚かざるを得

ず」⁹⁾と報いている。

(iii) 法と材。すべての統計学史上みられる論争—たとえば「表奴」, 「無味の「饒舌者流」の間の一は、鷗外によれば、すべて「材料と方法との差別に心付かざりし」⁹⁾ためであるとする。たとえばゲッチェンゲン学派のコンリング, アッヘンワール, シュレエツァー, ワッペウスの系譜で代表される古義家は「材料をして偏勝せしめ」、ケトレー, クニース, ヨナック, リューメリン, エンゲル, ワグナー, ハウスホーフ, ノイマン・スパルラート等で代表される新義家は「方法をして偏勝せしめる」¹⁰⁾ものとした。これは鷗外のきわめて鋭い見方というべきであろう。かかる区分法よりして、鷗外自身は新義に就くもので、今井をも含むスタチスチックは古義家に就くものとする。ここにおいてこの論争は自ずと結論が出たの感がある。

(v) 専門の境。鷗外は Statistik の語源をイタリア語の Statista=政治家に求めている。ゆえにラテン語の Status=国家状態をとらない。しかも、ここでワッペウスの立場をとり¹⁾, 政治家が法学とともに国民の統計的組織と運動とを審にする必要を強調するのである。また、スタチスチック社の人々は明白な議論で統計というのではなく、スタチスチックをワグナー, クニース等が国家学といい、エンゲルが社会理学といわんとしたと軌を一にするものであり、殖民的社会的の統計をのみ事とするものであるとする。

(vi) 因果の弁。今井は統計による法則を天法=Natürliche Ordnung なりとし、「自然の順序」, 「理法」なりとした。これは鷗外によれば「夫れ天法とは空中の樓閣なり, 矛盾の意義なり」¹²⁾であり、統計によって発見した現象の原因と法則と混同するものであるとする。けだし、統計は原因探求の方法でもなく、この方法による法則は因果と無関係のものである。そこで仮に「題言」中に述べた実験的研究と計数的研究との対立を通しての結合による科学的研究法が、ここでも問題となってくる。統計家は変化の存在を知りうるが、それがいかなる原因によるものかを知りえないのである。この段階で確率をとりあげる。鷗外はこれを「統計の一步を進めたるものなり。又統計の批判な

り。推数（確率…高木）の結果は自ら一種の法則を爲す。」¹³⁾という。マイヤがこれを「社会生活における合法則性」（Getetzmässigkeit in Gesellschaftsleben）といい、エッチンゲンが「経験の法則」（Erfahrungsgesetze）というのは実験の結果と混同するものである。かくして「統計は実に事実を摺撫すれども、原因を探求せず。事実と原因とは、固より全く相殊なればなり」と断言しているのである。

（vii）藪蛇の譬。鷗外はこれまで一度もスタチスチック社の杉亨二の名を明らかにしなかった。然るに今井の方からその領首の名を公示し、杉亨二の「統計の語を英仏等の国語に訳さば奇怪にして文明世界の笑とならん。」また「今スタチスチックに統計などの訳字あるより、学問上の唱へと通俗の唱へと二つに別れたり」という演説中の語を、未だ耳にせずとか同学中の何人かの言なりとした今井の独断をついている。かくして今井が藪を打って蛇を出だせしものとする。

以上の鷗外の見解へ対する今井の反論は、既述のように、その「再び統計に就て」で述べられた。その反論は（i）スタチスチックは科学にあらず方法なり、（ii）スタチスチックに統計といへる訳字にて意義通り、そして（iii）スタチスチックは原因を探り法則を知り得べきものにあらずという三要点に向けられる。（i）について彼は「スタチスチック家随一の大立者」としてエンゲルとマイヤを挙げる（360ページ）。すなわちエンゲルによれば「スタチスチックは方法となり科学となる。方法たるときは数量探討の法、科学たるときは人間社会及び国家の現象を探討し、然して原因の關係を解明するところの学なり」（Die Statistik ist eine Methode und eine Wissenschaft. Als erstere ist die Methode der Massenbeobachtung; als Wissenschaft sucht sie Leben der Voelker und Staaten in seiner Erscheinungen zu beobachten und ursaechlichen Zusammenhang darzulegen.）またマイヤによれば「スタチスチックは時としては広義に、時としては狭義に言ひ出さることあり。前身におりては科学上の探討に於けるスタチスチックの方法に就て論ぜられる場合にして、後者は之に反して独立の科学としてスタチスチックの範囲の狭く限られたる場合なり。（Dazu kommt dann weiter, dass auch heute nach von Statistik bald in einem weiteren, bald in einem engeren Sinne ges-

prochen wird. Eesteres ist der Fall, wenn nur im allgemeinen von der statistischen Methode wissenschaftlicher Forschung die Rede ist. Letzterse dagegen, wenn es sich um den enger begrenzten Kreis der Statistik als selbstaendiger Wissenschaft handelt.)を引用し、両者ともに Statistik の広狭両義説をとるものであり、鷗外は「葉籠中にはスタチスチックが医学に応用され、其方法となりたるものなればなり」(361ページ)とし、さらにリユーメルンが別の箇処に「スタチスチックは人間社会の一般の学科に対して理法上の補助学となるもの」(eine allgeneine methodologische Hilfswissenschaft der Erfrungswissenschaften von Menschen) (363ページ, G.v. Rümelin, ebenda, S. 263. 訳書435ページ)というはリユーメルンが「単に方法と認めざるもの」(362ページ)とし「君のリユーメルンと僕のリユーメルンと全く別人なれば、別に議論」を述べ、鷗外の抛り処であったリユーメルン解釈の相違を以て(i)に応える。

(ii)については、あくまで鷗外が「数え、統る」を以て統計とするの矛盾をつく。オンケン、リユーメルンもその統計を「自己の講究せし斯学の定義を森君の「シメル」合計するという統計という定義と同一視されたらんには二氏果して満足するや否や広く読者の判断に任す」(364ページ)とし、「医術にて人体を診断するに打診器とやらいう器具を要す」これより医学=打診学、打診器学といいえない。これより局量小なりという批判は当らずとする。(iii)法則論についても出生比の反覆は一種の法則であり、米食脚氣原因より米食=因、脚氣=果を固守する。

- (1) 森鷗外、新96ページ、旧683ページ
- (2) 今井が鷗外を「統計家、否刀圭家」と称したことについて「現にいみじき洒落の才かな。洒落哲学の著名土方学士の見玉ひなば如何に愛で玉ふらん」(新96ページ、旧683ページ)とやりかえしている。
- (3) 森鷗外、新96ページ、旧683ページ)
- (4) G.v. Rümelin, *Reden und Aufsätze*, Tübingen Bd I, 1875, S. 266, 訳書 441—2ページ
- (5) 今井武夫、「統計に就て」、『雑誌』第37号) 252ページ
- (6) 森鷗外、新99—ページ、旧685ページ
- (7) 今井武夫「統計に就て」(『雑誌』, 第39号, 256ページ
- (8) 森鷗外、新101ページ、旧680ページ

- (9) 同上 , 新104ページ, 旧687ページ
 (10) 同上 , 新104ページ, 旧689ページ
 (11) Wappäus, *Allgemeine Bevölkerungsstatistik*, II, S. 549
 (12) 森鷗外, 新107ページ, 旧692ページ
 (13) 同上 , 新110ページ, 旧695ページ
 (14) 同上 , 新110ページ, 旧695ページ

IV

これまでの鷗外と今井との論争の批判を湖上逸氏の名を籍り「統計三家論を読む」¹⁾に載せている。ここでの変名、次に出てくる忍岡樵客なる変名は単に論争形式上そうしたばかりではなく、当時の陸軍将校の発言に対して上官の何等かの制限があったためでもあろう²⁾。

湖上逸氏は雑誌第37号の前今井氏と第39号の後今井氏とに区別し、鷗外自身とその所論をつぎのように対比する³⁾。

前 今 井 氏

森 氏

後 今 井 氏

第一 統計は理法なるの説を唱ふる古人と今人に就て

余は論者(森氏)のスタチスチックの何物たるを知らずして大胆分敏の弁論を試みたるを驚かざるを得ず。…物を計りこれを統べて数門とするてふことがスタチスチックなりとは新規新作の定義にこそ。(「雑誌」第37号, 258ページ)

物を計りこれを統ぶるの定義は、分明にオンケン、リユーメリン等の奉ずる所にして新規にもあらずかし。如是の理法をこそ統計とはいへ。(「雑誌」第584号, 新103ページ, 旧688ページ)

ジユウスミルヒ、ケトレ以来、輩出せし諸家、各自思ひ思ひの定義を下せり。中には科学に非ずとなしたる者なきにあらず。リウテル、セイ、ポルトロック三氏の如き其重なるものなり。今また医学士森林太郎君なる論者現出せり。(「雑誌」第39号, 363ページ)

第二 統計の広狭両義あることに就て

この学問(統計)の目的は総量探討(?)の方法によりて社会の頭象を研究し、原因結果の関係を証明し、天法を知るにあり。然るに森氏は統計を理法なりとして難じたり。此項は一毫を借す能はず(「雑誌」第37号, 257—8ページ)

夫れ統計は理法の一区域なり。然れども、国家学のある区域にて計数を役すること尤も多き所にては、専門の計数的国家学者即ち所謂統計家を置くこと必要なるべし。而して此を重んず。余は新義家を取るのみ(「雑誌」第584号, 新104ページ, 旧690ページ)

エンゲル氏も亦広狭両義に分ち、広義は(方法)万有学の補助にして又は他学科に應用せらるる時、狭義は(科学)人間社会の事実を研究する所とせり。森氏は方法のみとする故一方の側面のみを見て、他の一方の側面を顧みざるもの如し。(「雑誌」第39号361ページ)

湖上逸氏はここで後今井の「二種の神器」の批判を試みる。すなわち、「柴詮氏や曲亭翁が統計といふ熟語を会計と同義に使ひしが為に、スタチスチック

を統計というは非なりとの説」³⁾とリューメリンの「人間社会の一般の学科に対して理法的の補助学とあるもの」によって、彼が統計を方法視したことの証としたことである。前者は「奇なる哉論や」であるとする。もし後今井の論法によれば「宋儒の理学」なる語のあることにより、Physik を理学と訳すことを許さないことになるし、漢土の明代まで砒石の異名を食塩と唱えたが、その意は全く異なる NaCl を食塩と訳すことが出来ないことになるという。したがって鷗外は「現世のスタチスチックに統計の字を附して毫も不都合なきを論じたるのみで」であるという。さらに湖上逸氏によれば鷗外は「物を計り之を統べて数門となすこと」を統計というが、「シメル、会計するといふ統計といふ定義」とは今井の勝手な定義であり、「何等の誣妄ぞや」となる⁵⁾。

神器の第二については、リューメリンの後今井の引用こそ「偶以て其統計を理法視したるを見るに足れり」⁶⁾とするものであり、統計学が独立科学にあらずして補助科学であることを明示するものであり、「森氏が理法と科学とを対挙せしは、其意図より特(独)立科学に在り」⁷⁾、理法(方法)もまた一つの科学であり、鷗外の科学を単に学と解する時は「理法と科学の対は学と学との対となりて其相殊たる点を発見すべかざればなり」⁸⁾としている。後今井の「君のリューメリンと僕のリューメリンとは全く別人なりや」⁹⁾に対して「両者の別よりは前今井氏の後今井氏に於ける別こそ甚しからめ。嗚呼」¹⁰⁾と反撃するのである。

以上は湖上逸民の今井批判であるが、鷗外は「新誌」第593号、(22年8月)に「答今井武夫君」なる詩一篇を載せた。そのなかに「妄談法則。…曰因曰果。…本是吾文。僅窺一例。夫子自云。百家援々。喧噪如蚊。…」¹⁾「客云。此詩意晦。漁史云。請客先読今井子文。則知意之晦在彼。…」とある。すなわち、皮肉って詩の意味の不明なのは今井の文に責があると。ところが、今井は「三たび統計に就て」(「雑誌」第41号、444ページ以下)に「僕実に其意のあるところを判断するに困む。偶々客ありて此詩を見て感嘆して曰く。是辞世の詩なりと。夫れ或は然らん。果して然らば森氏は遂に説尽き論絶へ此詩を遺して論場を退散し玉ひたるものか」と述べ、既述の「守方外」なる医師の自殺の和歌を掲げてい

る。鷗外の死に代って登場した湖上逸民は「森氏と比べて失敬ながら正直に申上れば金を以て鉄に換へたる心地ぞするなり」とし「此君は本議を棄て、枝葉の点を攻撃めさる、傾きあり」と難じている(445—6ページ)。そこで今井は次の三要点について反問する。

(i) 統計を以て方法論的科学とする立場への再批判であり、フランスの「セイ」等の統計学非科学論の一座に崇め、エンゲルス、マイヤの「独立するとき」と「応用せらるるとき」にて両義に別れる立場をとり、「前言後言」と又は「後言前言」と反するありや」と反問し、今井は2人の区別したことを非難している。

(ii) 今井はあくまで統計たる字を排除し「方今の學術社会に定義嚴然たるスタチスチックに現世の意味にて「シメル」合計又は統計するてふ外に通用せざる統計と呼ぶは全く無縁にして且是が為、本義を誤る弊害こそあれ利益なき無用の文字を附するものなり」(447ページ)というが、ここでの學術社会とは彼の属するスタチスチック社のことをいうのである。

(iii) 鷗外のリューメリン観を「人の説の一端を窺い全体を憶測しきふこと大胆なることよ」(448ページ)とし、同様にリューメリンを引用したモーリス・ブロックの *Traite Theorique et Pratique de Statistique* 1878…独訳は von Scheel: *Handbuch der Statistik, Deutsche Ausgabe als Handbuch der Statistik des Deutschen Reichs*, Leipzig, 1879…をみよと述べ、もし、「それで不満足なれば、「ウユルテンブルヒ」の「トウブリンケン」に居住する人なれば御問合せあれ」(449ページ)と軽くあしらうつもりであったが、後程鷗外に手痛く反駁される箇所である。

鷗外、今井はともに Statistik の訳字当否論を出発点として、派生的に統計学の科学的性格の問題に及んだのに対して、湖上逸民が、これを「小道具あつかい」にしたことに不満をもらしているが、これは今井の言のとおりである。

- (1) 湖上逸民「統計三家論を読み」、『新誌』第593号(明治22年8月10日)新115—9ページ、旧699—708ページ
- (2) 山田弘倫、上掲書、33ページ
- (3) 湖上逸民、新115—6ページ
- (4) 同上、新117ページ、旧701ページ
- (5) 同上、新117ページ、旧701ページ
- (6) 同上、新118ページ、旧702ページ
- (7) 同上、新118ページ、旧702ページ

- (8) 同上, 新118ページ, 旧702ページ
- (9) 今井武夫「再び統計に就て」『雑誌』第39号, 362ページ
- (10) 湖上逸氏, 新118ページ, 旧702ページ

V

今井の「三たび統計に就て」に対して鷗外は忍岡樵客の名を以て『「三たび統計に就て」を読む』を「新誌」第604号に載せた。ここに到って両者の論争はやや重覆・反覆気味を帯びてくるのである。この稿で忍岡樵客は次の四点について反論を展開している。すなわち

(i) 今井にして「統計」なる訳字を不当とするならば、何故に再三にわたりその論題に「統計」なる文字を使用するか。強いてこれを使用せんとするのであれば「統計の二字に就て」もしくは「スタスチックの訳に就て」と題し少なくとも『「統計」に就て』と題すべきであるとする¹⁾。樵客によれば「夫れ題目は人の面首の如く、木のクロオネ(冠)の如し。一望して以て其文の本領を賓にすべし」²⁾であり、これよりして今井の態度は支離滅裂というべきものであるという。

(ii) 詩意不晦。既掲の鷗外漁史の詩に「詩意晦」とあるを、今井は鷗外の詩そのものの詩意が晦いと解したが、鷗外によれば「意晦しと評せしは客なり」である³⁾。この客は未だ今井の文を読まない客であって、「意文晦在彼」の彼とは今井をさすのであり、「呼、今井君が「其意(詩の)のあるところを判断するに困しむ」所以のものは詩意の晦なるが故に非ずして、今井君が心の晦なるが故なり」⁴⁾と反撃する。この問題は論争上さして重要なものとは考えられない。

(iii) 訃音訛化。今井の既述の和歌は、鷗外の森自殺を風刺するものであるのに「一度は御目見え致し度し」とは今井が鷗外の「鬼を見んことを願へる」ものである。

(iv) 何謂要点。今井は「三たび統計に就て」で「三要点に就て、正々堂々

と攻撃あらんこと」を希むとするが、論争における要点は人により異なるもので、何処からでも反問せよというのが論争の眞の態度であるとする。

- (1) 忍岡樵客「三たび統計に就て」を読む、新123—4 ページ、旧705ページ
- (2) 同上、新123—4 ページ、旧705ページ
- (3) 同上、新123—4 ページ、旧705ページ
- (4) 同上、新124ページ、旧706ページ

VI

ここで再び湖上逸氏が登場してくる。すなわち「然れども彼、忍岡樵客とは果して何者ぞや。好事にも横合より飛出でて余が代りに敵に当らんとせり。左ればとて、之に打任せるままに圏外に躍出せんは文士の本意に非ず」¹⁾とし、「終始一身の今井君に向って再び筆峰を試み申さん」ため「新誌」第605号に「統計の訳語は其定義に負かず」を載せた。ここでも (1) 統計の以て事物の因果を知るべからざる所以に、統計の純科学に非ずして一理法なる所以、(3) 統計の二字には字源上より単に合計と云うに近い意味あるも、術語上より一理法の名称となすべき所以についてその考える展開する。湖上逸氏によれば (1) 今井は Massenbeobachtung の訳を誤り、(2) 単にその訳を誤ったばかりではなく、之を理解していない、(3) 単に之を解せないばかりではなく、その解せないものを指して之を解したという。今井は Massenbeobachtung を「総量探討」と訳したが、集団を集団としてとらえず、その総量探討の訳をスフィックスにたとえる。すなわち「総量」というのであれば、総＝統、量＝計を意味し、このことに疑問はない。しがるに「探討」という下半截あって原語と全く無関係であることをつき、総量＝統計の関連を主張する。すなわち今井にあっては beobachtung を単者＝単位に換元して探討することとする。すなわち鵬外の立場よりすれば今井には集団観察という思考は存在しなかったのである。なお、今井が後に Massenbeobachtung を大数観察法³⁾と訳したことについて「是れあに、大なる数を観察すると云ふ訳義なるか。大小は因より

比較的なれば、その以て大となす所以は十以上なるか、百以上なるか、抑億なるか、兆か、余得て而して知らざるなり」⁴⁾とし、「総量の量は「度多少」の量に非ずして「斗解」の量ならん。用語にして体言ならん」⁵⁾とし、その総体観察」の訳の正しさを力張るのである。

次に湖上逸氏は今井が *Massenbeobachtung* の意を解せざるものであることを、今井がその議論の根拠とした エンゲル 自身が *Statistik* = 統計の意に理解していること、従って今井の筆法よりすれば、エンゲルをも「馬を認めて鹿となしたる笑ふべき人物なり」⁶⁾とすべきである。これこそ今井が *Massenbeobachtung* の義を解せざるものとする所以なりとする。

Statistik を統計といえぱそれで事足るのであって、今井が批判のように「現世の意味にてシメル、合計又は総計するとふ外に通用せざる統計と称ぶは全く無縁にして、かつ文がため本考を誤る弊害こそあれ利益なき無用の文字を付するものなりと」するは、「その奇幻怪僻な文法語脈に驚きし」⁷⁾ところで、既に統計という訳字はスタチスチック社の杉亨二自身が使用している事実をあげて反論している。さらにスタチスチック社の河合利安が今井の「再び統計に就て」の前文に「左の一篇は今井氏自ら明言せらるる如く氏一家の持論にして因より社説を代表するものに非ざれば其心して読み玉わんことを。但余輩も此事に就ては多小の所見なきに非ざれどもそは今後の成行に任することし、茲に一の助言を加へずと云爾」⁸⁾と付記していることよりしても、むしろスタチスチック社一同は、この論争に一種の迷惑を感じていたかのようである。

今井は「統計の二字は荒唐杜撰の訳字なり」⁹⁾というに対して、これは荒唐杜撰なる語の本義を知らざることによる暴言であるとする、すなわち「荒唐」とは漆園の「繆悠之説、荒唐之言」、少陵の「神仙有無何渺茫、桃源之説荒唐」より出たもので「言論談話の荒蕩放恣なる事」をいう。また「杜撰」とは「用語に出处なし、来歴なく、自己の筆舌より出だす」を謂うものであり、前者に非ることは既述のとおりであり、後者に非ることは今井自身が普仏戦記、馬琴の『裏見の葛の葉』を引用して、その出处を示している事実をあげていること

によるとする。なお、湖上逸氏はスタチスチック社の新造語¹⁰⁾を「横陳長方形」(Liegende Vierecke)の符標とし、それをとらないとする。

次に今井がリユーメリン、エンゲルを誤解している事実を指摘する。既に前節で前者の所論の引用箇所の相違について述べたが、湖上逸氏の考えでは、リユーメリンはそこで統計学の定義を与えたのではなく、その補助科学説は「以て統計の一性質を明かにせしものに過ぎず」¹⁰⁾、強いてその意を推せば、統計学を論理学の一部なりとし、その独立科学性を否定するものである。かくして「嗚呼、今井君は特にエンゲルの語を解せざるのみならず、亦或はリユーメリンの語を解せざるものなるか」と強く反撃を加えるのである。なお、エンゲルの“Die Statistik ist eine Methode und eine Wissenschaft”を今井の「統計は方法となり、科学となる」という訳は誤りであって、「統計は法なり、而して学なり」とすべきである。けだし「エンゲルの一ウントは彼が統計をして含蓄せしむる両法を連繫したるまでにして決して統計が法ともなり、学ともなり変幻自在なりとの意」¹²⁾ではなく、「天下、豈未だ法とならざる統計と未だ学とならざる統計とあらんや」と¹³⁾、undの解釈一つによって根本的に重要な相違を来すことを明らかにし、今井の蒙をひらいているのである。しかし、マイヤの見解についての解釈には疑問とするものがある。すなわち、マイヤが広狭両義のあることを指摘したのは、“dazu kommt weiter,, 何をうけるものか断じ難いが、“auch heute noch”「古説の遺たるに過ぎざるを明らかにし、多少之を軽んずる意あり」としたが、広義の統計学は社会と自然の両分野に用いられる「あらゆる数量に大量観察に基くところの事実の確認並に分類」であり、独立的科学としての領域は「純粹に自然的な人間の社会生活と関連のない事実の観察は除去され、統計学の科学的領域は大量観察によってのみなされる得る人間の社会生活の数量的研究に限られる」¹⁴⁾という二分観は彼のその後の著書¹⁵⁾にもみられるところであって、湖上逸氏の解釈は当たらない。さらに「広狭の圏線は統計の本体と定義とに非ずして其応用区域のみ」¹⁵⁾とする。

次に今井がその第三駁議において誹毀讒謗の罪科の罪を以てするが、湖上逸氏はむしろそれは今井に帰して然るべきものとする。さらに (1) 古人に対する義務の論, (2) 因果法則の論, (3) 字義変遷の論を掲げて今井に反論するか, その説くところは既述の所論の反覆に終わっている。

- (1) 湖上逸民「統計の訳語は其の定義に負かず」、『新誌』第605号（明治22年11月），新128ページ，旧708ページ
- (2) 同上，新131ページ，旧711ページ
- (3) 今井武夫『雑誌』447ページ
- (4), (5) 湖上逸民，新128ページ，旧709ページ
- (6) 同上，新132ページ，旧712ページ
- (7) 新133ページ，旧713ページ
- (8) 河合利安『雑誌』359ページ
- (9) 今井武夫「三たび統計に就て」、『雑誌』第41号，（明治22年10月）448ページ
- (10) 湖上逸民，新138ページ，旧717ページ
- (11) 湖上逸民，新137—8 ページ，旧717ページ
- (12) 同上，新140ページ，旧720ページ
- (13) 同上，新140—1 ページ，旧720ページ
- (14) G.v. Mayr. *Gesetzmäßigkeit in Gesellschaftsleben*, München, 1877, S. 13—S. 14
- (15) G.v. Mayr. *Statistik und Gesellschaftslehre*, Tübingen, 1914, S. 31
大橋訳，79—80ページ

む す び

以上，わたくしは鷗外の統計学観を今井との論争を通して展開してきた。各行間より明らかなとおり，鷗外は徹底した方法論派に立つ。その理由は彼が一医学研究者であり，統計の利用者の側にあり，従って統計の解釈もしくは統計を利用しての法則定立的立場は医学の仕事であるとしたことより当然である。明治22年という時代に，このような格調高い統計学個有の論理の展開が，統計学者といわれる人々の手によらず，軍医であり，文士である鷗外によってなされ

たこと、あるいは既に述べたとおり、当時既に統計学学問論がかくも激しくなされたことは高く評価して余りあることをしるして本稿を終る。